

6 無痛文明の中の人間

無痛化する現代社会においては、その外部に存在するかもしれない苦しみや訴えかけに対する感受性がはげしく低下する。自分たちの社会の外側で呻いている苦しみや訴えかけをのほほんと聞き逃し、自分の脚で彼らを踏みつぶして殺しておきながら、そのことにまったく気がつかないで陽気な歌を唄っている文明人。「存在抹消」「目隠し」「解毒」「予定調和」によつて、みずからの存在の弱点を徹底的に武装した鎧の王者にとつては、その分厚い鎧を貫いて内部に入つてこないような外界の声は、存在しないも同然なのだ。鎧を着て野原をすすむ戦士には、その重厚な金属の脚で踏みつぶされた虫の叫びなどけつして聞こえはしない。

みずからの苦しみを徹底して無痛化していった者こそが、もつとも他人の苦しみを感じとらず、もつとも他人の訴えかけを聞くことせず、他人を一方的に押しつぶしておいてそのことにもつとも気づかないのだ。だから、無痛化していく文明社会とそのなかに住む人間たちこそが、おそらく地球上で最大の暴力行使者となるであろう。彼らの犠牲になるのは、まだそれほど無痛化に陥つておらず、苦しみやつらさのなかでみずからの存在を味わい、そのなかで生の意味を見出そうとしたり、あるいはそこからはいだ

そうともがいている人々であろう。暴力行使者たちは、それらの人々の声が聞こえないだけでなく、それらの人々が足元に存在しているということすら気づいていないのかもしれない。いや、ひよつとしたら、実は見えているにもかかわらず見えないことにしているのかもしれない。

無痛文明は、それらの人々を次々と押しつぶしながら、地球上に徐々に拡大していくだろう。自分自身の内的世界は完全な予定調和になつておりながら、外部の声なき声を次々と押しつぶしていつてそのことに気づかない善人という名の暴力行使者たちが、自分たちの存在と行為とを自己肯定しながら地球上にアメーバのように広がっていく運動、それが無痛文明だ。

みずから家畜となることを選択した文明人は、その道筋を選ばなかつた人間たちを、力によって征服し、支配し、従属させる。家畜となることと引き替えに、他を支配従属させることができるとは、なんとという逆説なのだろう。しかし冷静に考えてみればそれは当然のことなのかもしれない。「身体の欲望」に負け、生命のよろこびを失つた者のみが、他の人間たちをもつとも徹底的に支配し尽くすのである。

(書籍版に続く・・・)